10/28/2005

＊キリスト教学特殊講義＊＊＊＊＊　　S.　Ashina

３．現代の環境論とキリスト教思想

創造論と環境－いわゆる人間中心主義について－	10/14
自然神学の生命論と環境破壊－近代の諸相－	10/21
環境破壊の原因を問う－欲望論－	10/28
環境破壊を超えて－ヴィジョン・希望・共感－	11/11

４．現代の生命論とキリスト教思想

展望－自然神学の可能性－	12/16

３．　現代の環境論とキリスト教思想

３　　環境破壊の原因を問う ―欲望論―

＜前々回・前回＞

１．現代の環境破壊に対するキリスト教との関わりあるいは責任性という問題

・現代の環境危機の直接的原因は古代の創造物語にまで遡及できるものではなく、第一義的に問われるべきは近代の科学技術の進展とそれに伴う人間社会のあり方の変貌であるということ。

・17 世紀の近代的な社会システムのイデオロギーとして機能したニュートン主義の自然神学（レイ）には、現代の環境破壊の原因とも言える人間中心主義を見ることはできないこと。

・近代という時代区分における 17 世紀までと 18 世紀以降との間の変化にこそ注目すべきであること。18 世紀前後の変動については、キリスト教思想の側から（トレルチ）だけでなく、科学史研究の側から（ジェイコブ）も議論が行われてきたこと。

２．問題：この 18 世紀前後の転換・変化が何であったのか、環境破壊の根本原因をどのように捉えるのか

３．リン・ホワイト、リートケ

４．近代固有の問題状況：欲望、そして近代社会の精神性としてのブルジョワ精神

（１）ホワイトとリートケ

５．リン・ホワイト：1967 年に科学雑誌『サイエンス』に掲載した「今日の生態学的危機の歴史的起源」という論文

６．「言うもばかばかしと思われるほど確かな一つのことがある。それは、近代技術も近代科学も、明確に＜西洋的＞であるということである。」(White[1967], p.186)

「確かに、我々の思考と言語の諸形式はおおかたはキリスト教的であることを止めてしまった。しかし、私の見るところ、実体はしばしば驚くほど過去の実体と類似したままなのである。」(ibid.,p.189)

「キリスト教、とりわけ西方的形式のキリスト教は、世界がこれまで知っている中で最も人間中心的な宗教である。」(ibid.)

「技術と科学の成長はキリスト教教理に深く根ざした自然への特有の態度を離れては、歴

史的に理解することはできない。たいていの人々がこうした態度をキリスト教的と考えないという事実とは無関係である。我々の社会では、キリスト教の基礎的価値に取って代わるべき、新しい一連の諸価値が受け入れられたことはない。このことから、我々が自然は人間に仕える以外の存在理由を持たないというキリスト教の公理を斥けるまでは、我々は生態学的危機を悪化させ続けるであろう。」(ibid., pp.192-193)

「我々の悩みの根源が深く宗教的である以上、救済もまた、我々がそれをそう呼ぶかは別にして、本質的に宗教的でなければならないのである。」(ibid., p.193)

７．キリスト教が人間中心主義的である。西欧近代の科学技術とキリスト教とは本質的な関わりがある。二つの論点

８.リートケ：聖書的な創造信仰は神が自然の内に内包されるという考えを否定しており、その意味で自然を非神化(Entgötterung)あるいは非神話化している。しかし、「キリスト教的な自然の非神化を近代的な技術や自然科学の唯一の原因と見なす」見方は、事態をあまりにも単純化しすぎていると指摘する。

９.「近代技術は近代自然科学の発展の単なる結果であるというのは」正しくはなく、「西洋の技術は近代の自然科学（と技術）とに先行していたのである」(ibid., S.46)。

10. 現代の環境危機において問われている人間中心主義の出現と近代

デカルトの二元論的形而上学によって、「広がりとしてのみ規定される自然と自然を考察する広がりを持たない精神」とが分離したこと(ibid., S.53)、つまり、自然と人間とが分離したということである。自然の実在性が究極的には思惟する人間に依存するという自然理解を伴うことによって、そこから、人間は自然の主人また所有者であるとの考えが成立したと論じている(ibid.,)。

11. 「すべての安全装置が崩壊してしまった。すなわち、あらゆる古代のタブー、ピュシスの神々を前にしたあらゆるヌミノーゼ的な恐れ、自然は人間だけに帰属するのではないというあらゆる考え、そしてついには神の被造物としての自然の性格までも喪失してしまった。自然、それは今や人間が処理し支配できる人間の下にある人間の物質なのである。」(ibid., S.57)

（２）環境危機にとっての近代の意味

①近代固有の問題

・欲望の普遍性→現代の人類最大の問題となっている環境危機は、こうしたこれまでも歴史的に見られた破壊とどこが異なるか

・破壊の不可逆性あるいは修復不可能性　cf.持続可能性

・危機のグローバル化　cf. 特定地域に限定された危機

②欲望の変質

近代文明が人間の欲望に与えた影響、つまり、近代における欲望が、それ以前のいわば自然的なレベルから著しく逸脱してしまったこと。科学技術の進歩とそれとリンクして増大する人間の欲望、この両者の複合体がある一定のレベルを超えたとき、上に挙げた破壊の不可逆性とグローバル化が生じた。

↓

欲望の肥大化は構造的なレベルでの批判的分析を必要とする。社会批判

（３）ブルジョワ精神とデモーニッシュなもの

・*Die religiöse Lage der Gegenwart* 1926, in: *Paul Tillich. MainWorks 5*, S.27-97

Wir fragen zu diesem Zweck nach den geistig mächtigsten, den eigentlich symbolischen Schöpfungen jener Zeit. Es sind drei: die mathematische Naturwissenschaft, die Technik und die Wirtschaft; und alle drei gehören zusammen. Die Wissenschaft dienst der Techinik und feiert in ihr ihre höchsten Triumphe; die Technik dienst der Wirtschaft und ermöglicht ein die Erde umspannendes Weltwirtschaftssystem. Träger dieser dreifachen Tätigkeit --- und wieder getragen und gefestigt von ihr --- ist die bürgerliche Gesellschaft.(32)

Was ist nun aber der Gehalt einer solchen Geisteslage ? .... Offenbar ist sie ein äußerster Fall des sich selbst behauptenden, in seiner eigenen Form ruhenden Daseins. .... Sie ruhen in sich und schaffen eine in sich ruhende Gegenwart. Und alle Seiten des Lebens, die dem Geist der rationalen Wissenschaft, Technik und Wirtschaft unterworfen sind, zeugen von der in sich bleibenden, sich selbst und ihre Endlihkeit bejahenden Zeit. (34)

Die bürgerliche Gesellschaft ist geboren mit der Befreitung der Wirtschaft von den Bindungen einer übergeordneten Sozialform und der Durchsetzung einer autonomen, ihren eigenen Gesetzen folgenden Wirtschaft.(53f.)

Das Verhältnis zu den Dingen wird in der freien Marktwirtschaft eroslos, gemeinschaftslos, herrschaftlich.Die Dinge werden Waren, d,h, Gegenstände, deren Sinn es ist, durch Kauf und Verkauf Profit zu schaffen, nicht aber, den Umkreis der persönlichen Lebens zu erweitern. Sie werden herrschaftlich, nicht gemeinschaftsmäßig erworben und veräußert. Darum hat ihr Erwerb auch keine Grenze. Die freie Wirtschaft treibt notwendig zu dem in sich unendlichen händlerischen Imperialismus. (54)

・*Die sozialistische Entscheidung*, in: *Paul Tiliich. MainWorks 3*, S.273-419

Die beiden Wurzeln des politischen Denkens

Menschliches Sein und politisches Bewußtsein

Ursprung / Forderung, Woher / Wozu

Das ursprungsmythische Bewußtsein ist die Wurzel alles konservativen und romantischen Denkens in der Politik. (291)

Ursprungsmythische Mächte,

der Boden, der Ursprung des Blutes :Muttersymbol

der Ursprung aus der sozialen Gruppe :Vatersymbol

Der Bruch mit dem Ursprungsmythos im Judentum

Der Ursprungsmythos hat notwendigerweise polytheistische Form. (300)

Es ist die Bedeutung der jüdischen Prophetie, den Ursprungsmythos und die Raumbindung ausdrücklich bekämpft und überwunden zu haben. (302)

Der Bruch mit dem Ursprungsmythos in der Aufklärung und die romantische Reasktion.

Bürgerliches Prinzip

Ihr Prinzip ist die radikale Auflösung aller ursprünglichen Gegebenheiten, Bindungen und Gestalten in rational zu bewältigende Elemente und die rationale Zusammenfassung dieser

Elemente zu Zweckgebilden für Denken und Handeln. ... der bürgerliche Mensch als fremde Macht entmächtigt die Eigenmächte des Daseins: er entmächtigt sie durch Unterwerfung unter seinen Zweck. Und der Weg der Entmächtigung ist Verdinglichung und Analyse. In jedem Ursprung ist ein Moment von Unbedingtheit. Das ganz Bedingte, das bloße Ding, hat kein Zeichen des Ursprungs mehr an sich. Darum ist die vollkommene Verdinglichung die vollkommene Beseitigung der Ursprungsbezihung des Seienden, seine vollkommene Profanisierung. Der Geist der bürgerlichen Geselleschft ist der Geist einer Menschengruppe, die nach Durchschneidung jeder Ursprungsbindung eine verdinglichte Welt ihren Zwecken unterwirft.

Die Verdinglichung bezieht sich ebenso auf die Natur wie auf die Gesellschaft. Die Analyse der Natur führt zu ihrer Reduktion auf die zweckmäßiges System mathematischer Funktionen und Verwendung der funktional berechenbaren Elemente im Dienst techniche-wirtschaftlicher Zweckseztung. (323)

・Das Dämonische: Ein Beitrag zur Sinnbedeutung der Geschichte 1926, in: *MainWorks 5*, S.99-123

Das Dämonien der Gegenwart

Die Profanisierung ist immer Rationalisierung, das heißt Erfassung der Dinge durch Auflösung in ihre Elemente und Zusammenfassung unter dem Gesetz. Diese den Dingen wesensmäßige und dem Verhältnis von Subjekt und Objekt angemessene Haltung wird dämonisch verzerrt durch den Herrschaftswillen, der sich ihrer bemächtigt und den Dinge die Wesenhaftigkeit und Selbstmächtigkeit raubt. (120)

In der praktischen Sphäre sind es gleichfalls zwei Dämonien, die an Bedeutung und Symbolkraft alle anderen überragen und das Antlitz unserer Zeit formen. Es ist die Dämonie der autonomen Wirtschaft, der Kapitalismus, und die Dämonie des souveränen Volkes, der Nationalismus. (121)

（４）環境危機にとっての近代の意味

①エコロジーの神学:人間中心主義として批判されている点に関して必要な修正を行い、それを相対化すること。

・形而上学的な人間中心主義と方法論的な人間中心主義。

方法論的な人間中心主義の不可避性。

②方法論的人間中心主義が形而上学的人間中心主義にすり替わってしまうということ。

・18 世紀以降、つまり、産業革命と市民社会の安定化に伴った近代世俗主義の進展と近代帝国主義の登場。

・自然神学において、方法論的な人間中心主義が形而上学的人間中心主義へすり替わるのを防いでいたもの。

神中心主義：人間中心主義の相対化の視点。

③伝統的な神中心主義の喪失→方法論的人間中心主義が形而上学的人間中心主義へすり替わるのを防ぐ歯止めも失われてしまう。

・18世紀へ移行する過程で、生物学以外の学問分野では、自然神学は急速に力を失い、自然神学を要として成立していた知的世界に分裂が生じることになる。ここに、科学技術から神中心という観点が喪失するという事態が発生することになり、人間のための有用性の追求は、それが変質するのを防ぐためのチェック機構を失い、歯止めのない欲望の自己目的化・肥大化へと道を開くことになる。

④現代の環境危機との関わりで、自然神学の現代的意味を再評価するとするならば、おそらく、それはキリスト教神学が立つ神中心主義と、現代の科学技術との間に相互チャックあるいはコミニュケーション可能な基盤を再確立するという点に求められる。

＜文献＞

１．Gerhard Liedke, *Im Bauch des Fisches. Ökologische Theologie*, Kreuz Verlag 1979

Lynn White, The hisitorical Roots of our ecological Crisis, in: Roger S. Gottlieb（ed.), *This Sacred Earth. Religion, Nature, Environment*, Routledge 1996, pp.184-193

２．Donella H. Meadows et al., *The Limits to Growth*, Universe Books 1972.

Donella H. Meadows et al., *Beyond the Limits*, Chelsea Green Publishing Company 1992.

たとえば、1992 年の『限界を超えて』では、その結論を要約する中で、「持続可能な社会(a sustainable society)への移行は長期的目標と短期的目標の間で注意深くバランスを取ること、また産出量よりも十分さ、平等、生活の質を重視することを要求する。それは、生産性や科学技術以上のもの、すなわち、成熟さ、共感、そして知恵をも必要とするのである」(xvi)と述べることによって、環境危機を超えて目指されるべき社会の特性として、「持続可能性」が導入されている。この持続可能性は、現代の環境論において、危機を克服する社会を経済や政治といった観点を含めて論じる上でのキーワードとなっており、その点については、たとえば、次の文献を参照。

内藤正明・加藤三郎編　『岩波講座 地球環境学10　持続可能な社会システム』
岩波書店　1998年。

３．人間存在と欲望との関わりについて、丸山圭三郎は、言語（言分け構造）の問題として、「この Zuhandenheit の基底にあるものは＜欲求　besoin ＞ではなく＜欲望 désir ＞である」(丸山[1985], 53 頁)と指摘している。

丸山圭三郎　「言語と世界の分節化」、
『新岩波講座哲学２　経験 言語 認識』岩波書店　一九八五年、pp.35-64。